

発表No.B1-19

競争的な水素サプライチェーン構築に向けた技術開発事業／
大規模水素サプライチェーンの構築に係る技術開発／

低炭素社会実現に向けた 水素30vol%超混焼ガスタービン発電設備の研究開発

発表者名

松本 照弘

団体名

三菱重工業株式会社

発表日

2024年7月18日

連絡先：

三菱重工業株式会社

<https://www.mhi.com/>

事業概要

1. 期間

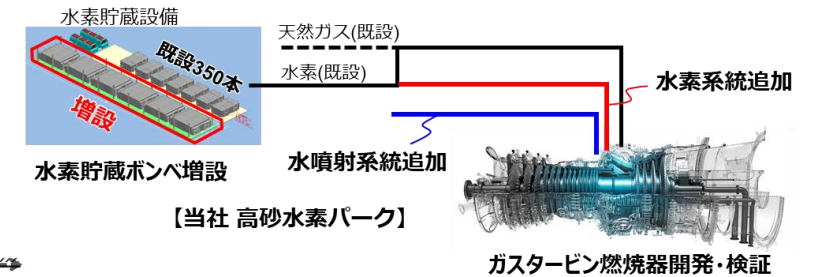
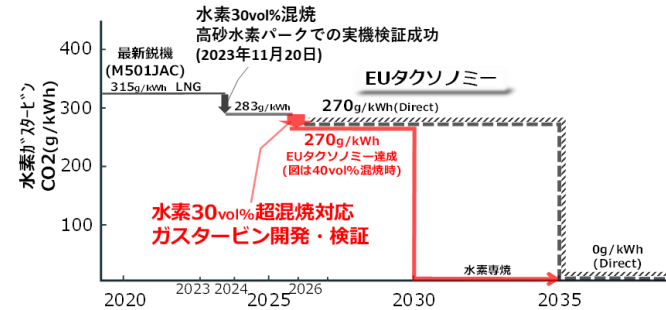
開始 : 2023年 8月
終了 (予定) : 2026年 3月

2. 最終目標

- A) 既存の予混合燃焼器の改良により逆火を抑制し、**水素30vol%超における安定運転を可能**とするガスタービン燃焼器を開発、当社高砂水素パーク内の実証発電設備にて検証、安定運転を確認し**EUタクソノミーのCO2排出基準：270g/kWhを達成**する
- B) 開発した燃焼器の実機適用を迅速に行うために、既存天然ガス焚きプラントでの改造範囲をミニマムとする系統設計を行い、また、高砂水素パークにおける実機実証を実現するため、**水素貯蔵設備、水素供給系統の設計・敷設および運用・制御の開発を完了**する

3. 成果・進捗概要

- A) 逆火を抑制しながら水素混焼率を増加させる打ち手として、『リスクを伴わない拡散燃焼方式のパイロットノズルから多くの水素を投入』する燃焼器コンセプトの開発を行い、**単缶燃焼試験にて水素50%に到達、EUタクソノミー達成の実現可能性が確認した**。引き続き、実機実証に向けて開発を進める。
- B) 当社高砂水素パークでの実機検証に向けた**必要な改造項目の抽出を完了、改造工事着工**した。また、水素供給量の大容量化のために必要な**図面製作完了。基礎工事完了し、順次蓄圧器据付作業中**。

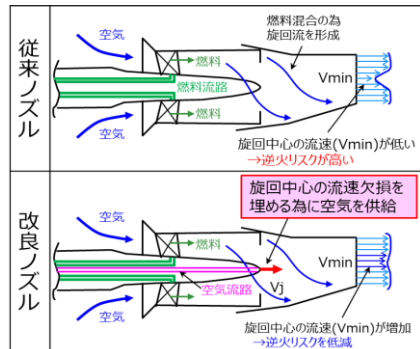


1. 事業の位置付け・必要性 ◆先行NEDO事業の紹介

- NEDO事業にて水素30vol%混焼燃焼器の開発完了 ➡ 新設・既設改造の両面で複数の商談あり
- 2023年11月20日、当社 高砂水素パーク内のGTCC実証発電設備（第二T地点）において水素30%混焼運転に成功

NEDO事業成果(2015~2018年度)

- ✓ 旋回中心の速度欠損部に空気を供給する事で、渦芯の速度を上昇させ、フラッシュバックに対する耐性を向上させた
- ✓ 改良ノズルの実圧燃焼試験の結果、水素30vol%条件においてフラッシュバック発生の特候無く、安定運用が可能なことを確認



ノズル改良内容

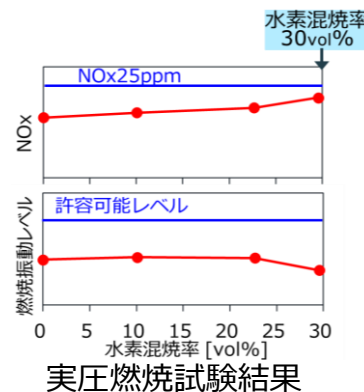
研究目標：
水素20vol%混焼
燃焼器の開発

↓
水素30vol%混焼
燃焼器の開発完了

2023年11月
高砂水素パーク内の実証発
電設備において、
水素30vol%混焼運転に成功



実圧燃焼試験設備



実圧燃焼試験結果



2023年11月20日14時47分 水素30%混焼到達 (写真：中央制御室)

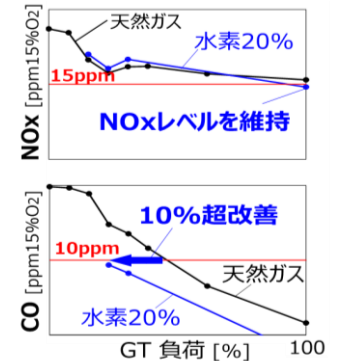
事業化
➡

事業化事例

米国マクドノフ・アトキンソン発電所での実証試験 成功

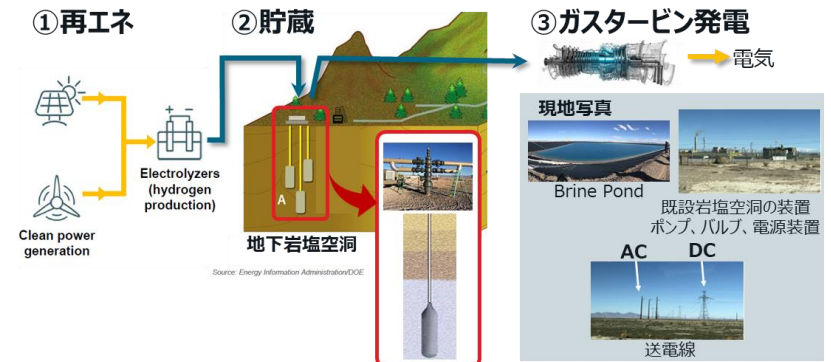


マクドノフ・アトキンソン発電所 (写真提供：ジョージア・パワー)



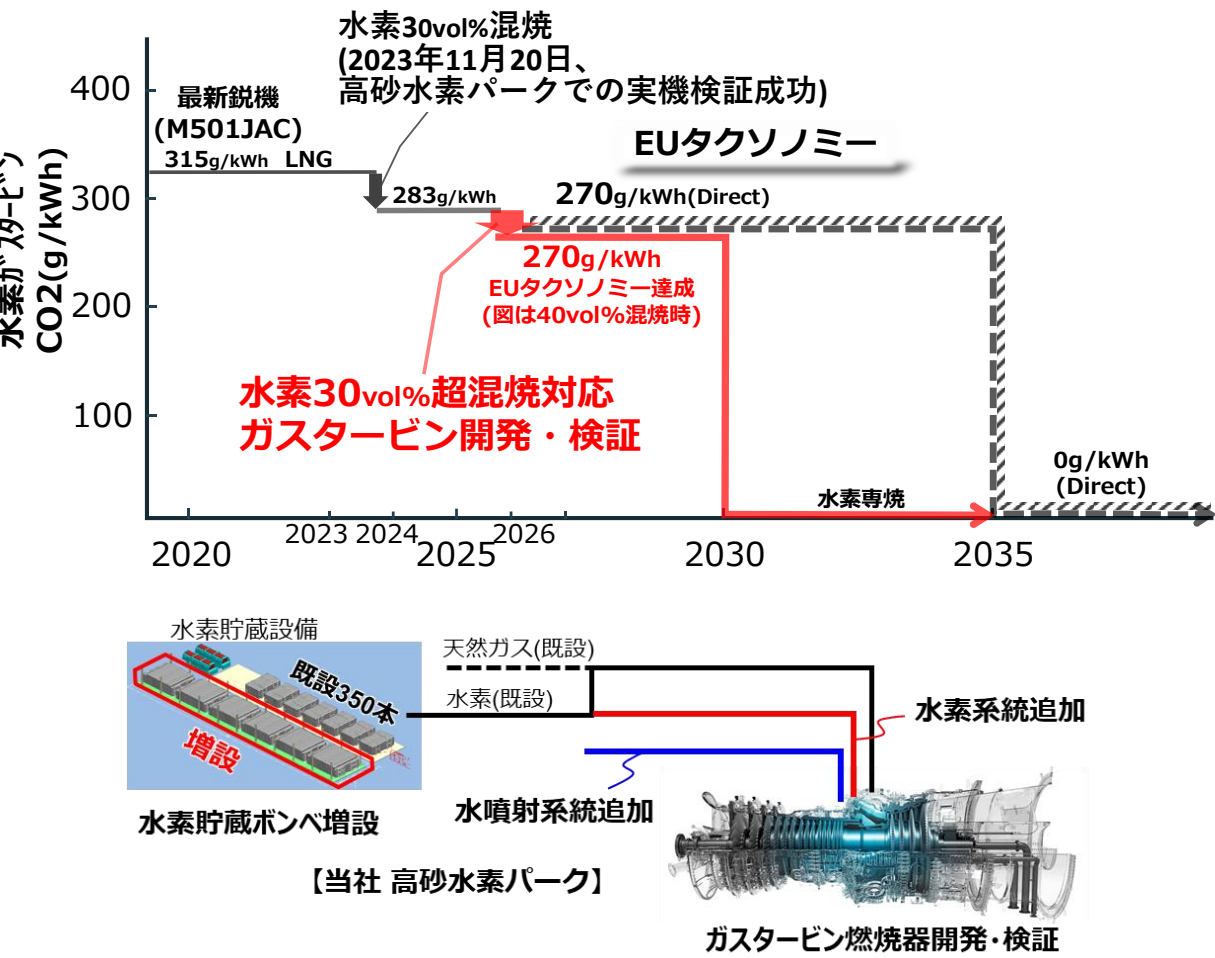
米国インターマウンテン電力が計画するGTCC PJ受注

水素焚き501JAC形ガスタービン840MWを受注済
2025年に水素30%混焼 / 2045年までに100%専焼を計画



1. 事業の位置付け・必要性 ◆事業概要と社会実装イメージ

- NEDO事業にて水素30vol%混焼燃焼器の開発完了 ➡ 新設・既設改造の両面で複数の商談あり
- EUは新たなCO2排出基準“EUタクソミー”を定め、この基準を満たすためには更なる水素混焼率の拡大が必要。
当社は、水素専焼燃焼器の開発を実施中だが、一足飛びに水素専焼とはならず、30vol%と100vol%の間をつなぐものが必要。
- ➡ **水素インフラ導入期での実用化を目指し、水素30vol%超混焼を可能とするガスタービン燃焼器の開発を行い、海外他社に先駆けてEUタクソミーのCO2排出基準270g/kWhの達成し、国内外の火力発電所へ適用、カーボンニュートラル社会実現に貢献する**



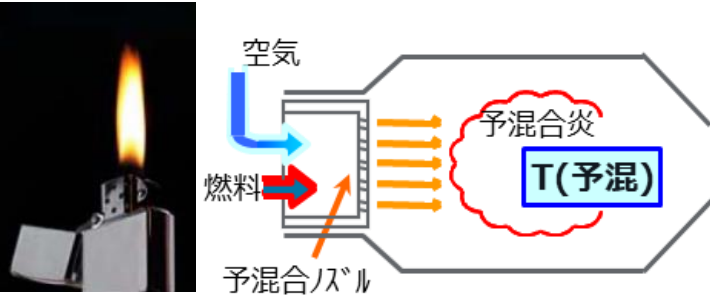
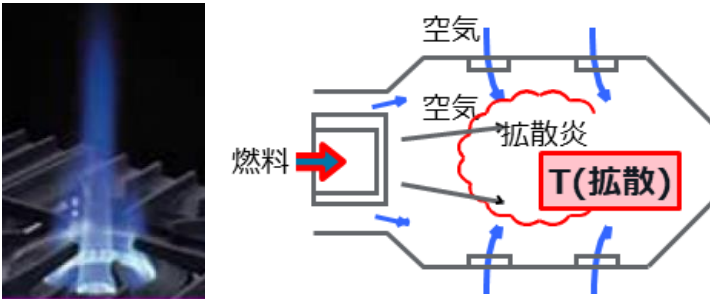
水素インフラ整備（イメージ）		2020	2025	2030	2040	2050年
水素30% 水素30%超 水素100%	高砂水素パークで模擬	導入期				
		成熟期（水素30%超）				
		成熟期（水素100%）				
燃焼器型式	水素含有量	開発・運用状況				
		2020	2025	2030	2040	2050年
予混合燃焼	30%	2018 水素30%混焼実証試験完了 NEDO PJ				
	30%超	2022 水素30%超混焼実証試験 燃焼試験				
マルチクラスター	30%	2022 水素30%混焼実証運転（商用プラント）				
	100%	2022 水素30%超混焼実証運転（第二T地点）				
		2030 水素30%混焼実証運転（第二T地点）				
		2040 水素30%混焼商用化				
		2050年 水素100%商用化				

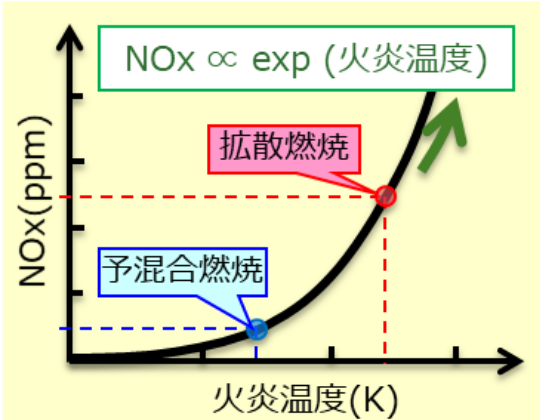
1. 事業の位置付け・必要性 ◆水素燃焼による課題

燃焼器低NOx化技術(拡散方式と予混合方式)

予混合方式とは

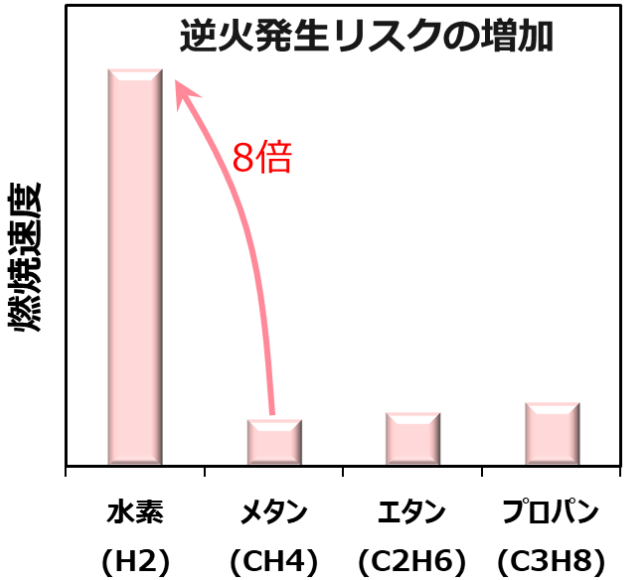
多くの大型プラントに適用、燃焼ガス温度を下げることでNOx低減が可能
一方で、火炎の位置が不安定になる場合があり、**逆火(フラッシュバック)リスク**を伴う

形式	拡散方式	予混合方式
構造		
燃焼特性	- 燃料と燃焼用空気を別々に噴射 - 高温スポットが生じやすい (NOx高) - 火炎が安定	- 燃料は空気と混合され噴射 - 高温スポットが生じにくい (NOx低) - 火炎の位置が不安定: 逆火リスク
特徴	- 燃料性状変動への許容範囲が大きい - 燃料系統が簡素 - NOx対策(蒸気/水噴射)による性能低下	- CO2削減(高効率)と低NOx化を両立 - 燃料系統が複雑



水素燃焼による課題

水素は“燃えやすい”燃料であり、
燃焼速度が上昇 ⇒ **逆火発生リスク増加**

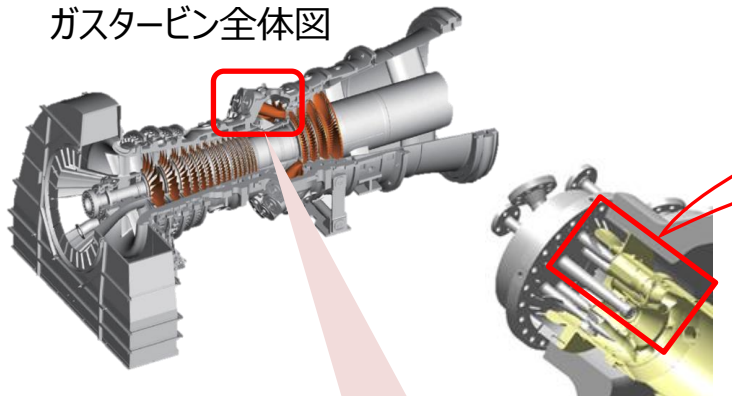


1. 事業の位置付け・必要性 ◆水素燃焼による課題

逆火（フラッシュバック）

逆火とは、燃焼速度が燃焼器内空気流速より早い時、火炎面が上流側に移動することを指し、逆火によりノズル等が高温に晒されるため、損傷が発生する

ガスタービン全体図



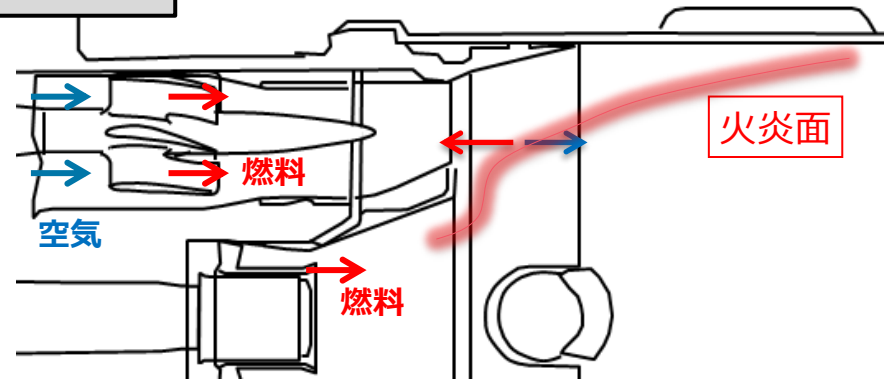
低NOx燃焼器

燃焼器

空気と燃料を混合、燃焼することで、タービンを作動する為の高温/高圧ガスを生成する

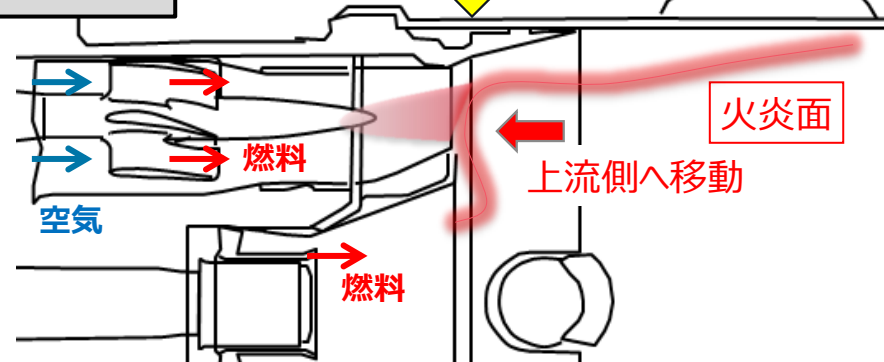


安定燃焼時

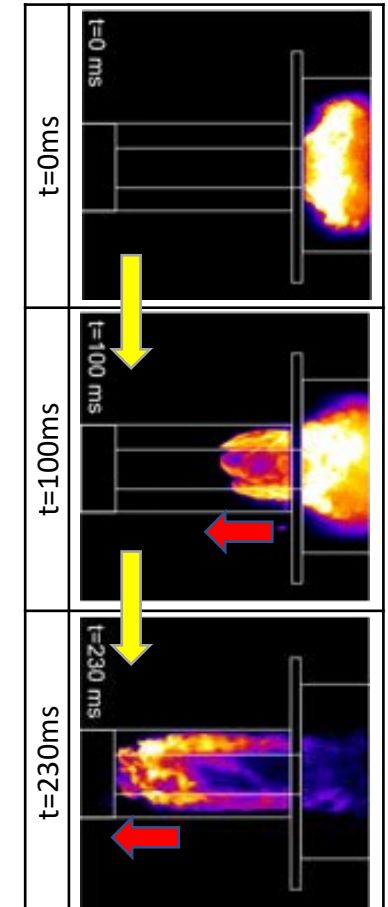


空気流速 < 燃焼速度

逆火発生時



逆火発生時の様子

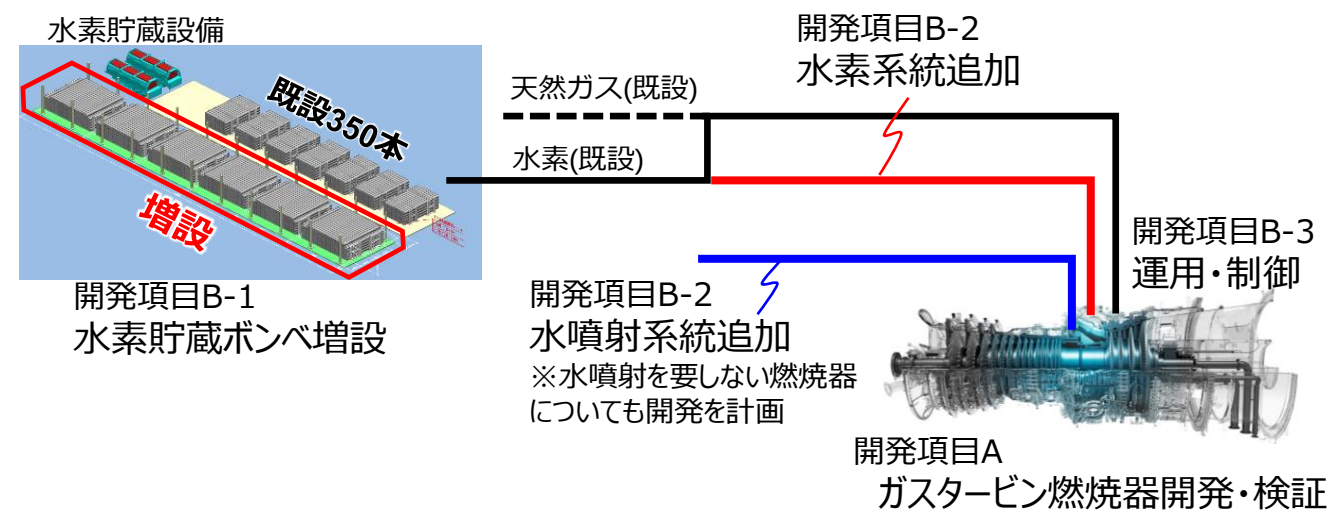


出典：University of Michigan at the 2014 University Turbine Systems Research Workshop

2 . 研究開発マネジメントについて

◆研究概要・スケジュール

- 研究開発項目A：ガスタービン燃焼器設計技術
- 水素混焼率の増加は 逆火(火炎の遡上)のリスクが高まる。既存の予混合燃焼器の改良により逆火を抑制し、水素30%超混焼における安定運転を可能とするガスタービン燃焼器の開発を行い、当社『高砂水素パーク』内の実証発電設備にて検証、安定運転を確認する。
- 研究開発項目B：プラント設計技術
- 開発した燃焼器の実機適用を迅速に行うために、既存天然ガス焚きプラントでの改造範囲をミニマムとする系統設計を行う。また、高砂水素パークにおける実機実証を実現するため、水素貯蔵設備、水素供給系統の設計・敷設および運用・制御の開発を行う。



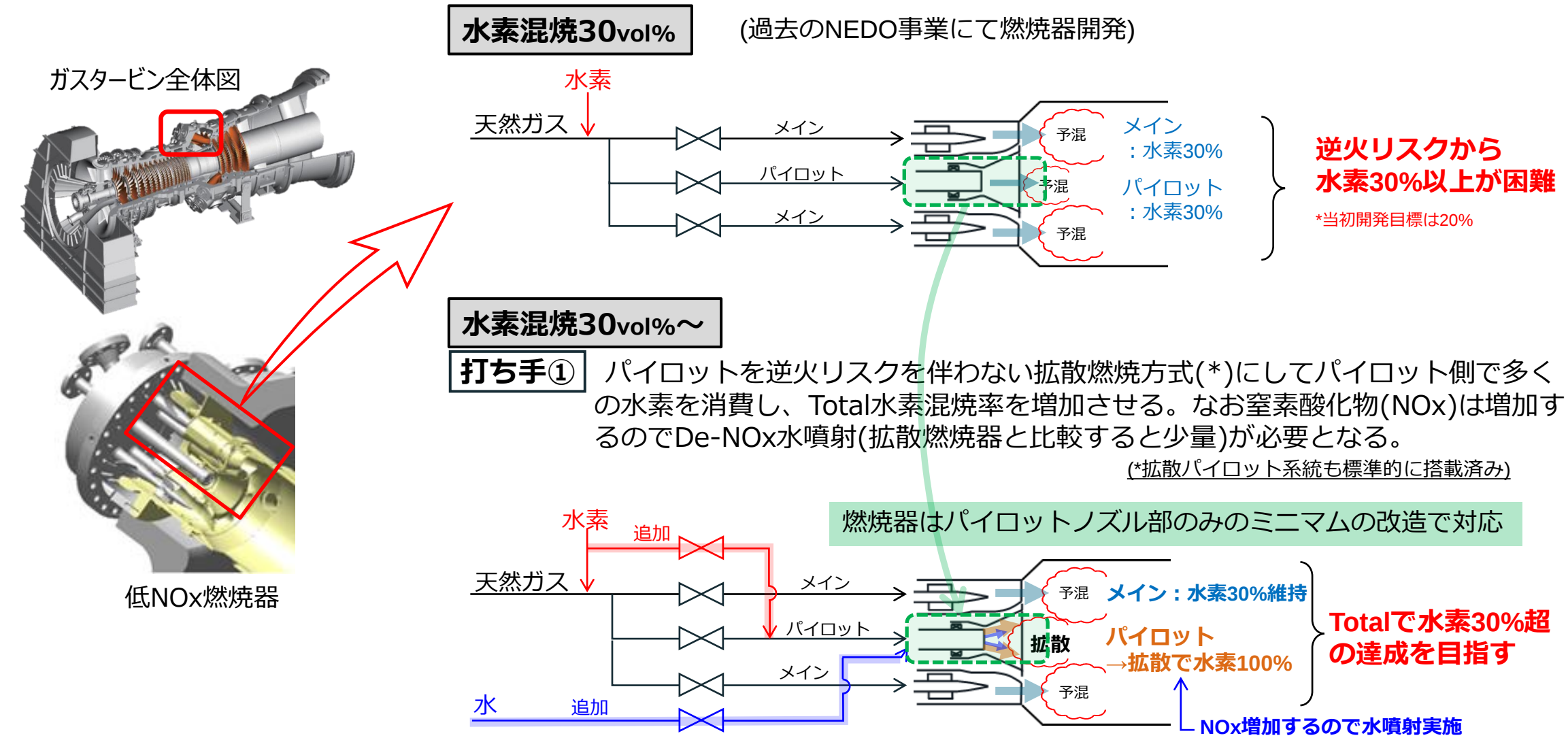
		2023年度	2024年度	2025年度	2026年度
研究開発項目A	A-1:逆火耐性向上設計技術	数値解析・非燃焼試験・要素試験 単缶燃焼試験 実機検証			
	A-2:単缶燃焼器による実機圧力燃焼試験				
	A-3:当社実証発電設備での実機検証				
研究開発項目B	B-1:水素供給量の大容量化	設計・図面作成・据付工事・検証 設計・図面作成・改造工事・検証 運用方針策定・検証			
	B-2:天然ガス焚きからの仕様変更方針策定				
	B-3:運用・制御に関する検討				

水素30%超混焼燃焼器を
国内外の発電所へ適用
➡カーボンニュートラル社会
実現に貢献



3. 研究開発成果について ◆A.燃焼器開発： 目標達成に向けた打ち手①

課題：水素混焼率30vol%以上は、既存予混合燃焼方式では逆火リスクが増加する
打ち手①：リスクを伴わない拡散燃焼方式をパイロット側に用い、水素混焼率を増加させる。



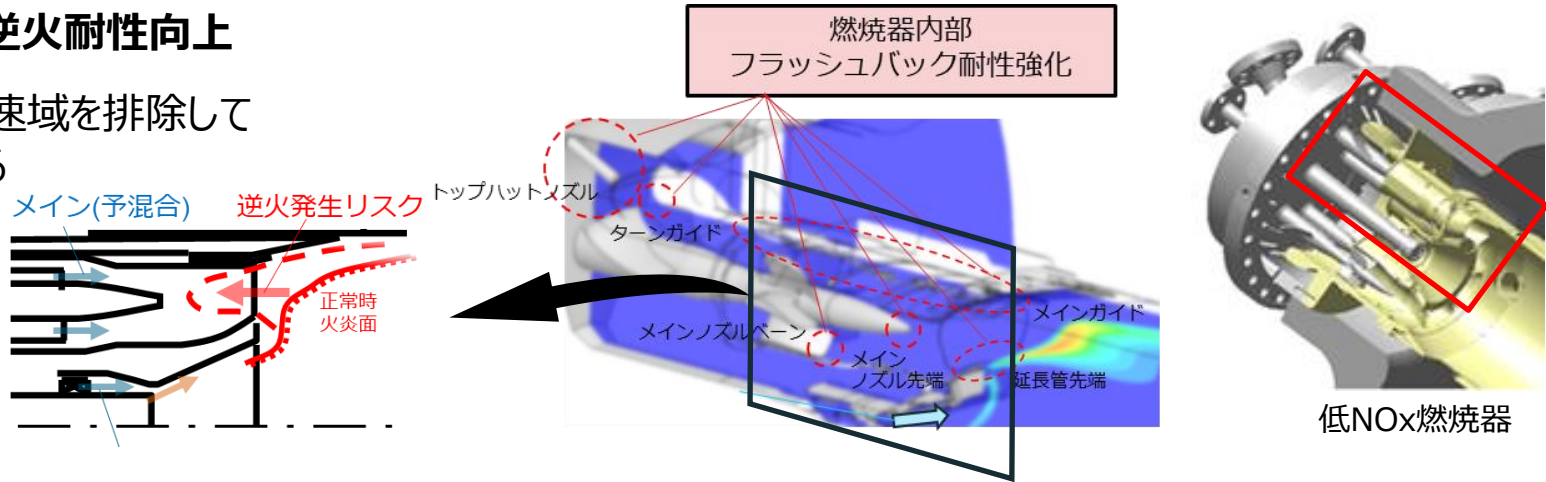
3. 研究開発成果について ◆A 燃焼器開発： 目標達成に向けた打ち手②,③

課題：予混合燃焼方式では水素30vol%混焼から大きく増加することは逆火リスクが伴う

打ち手②：メイン(予混合)のフローパスの低流速域を排除して逆火耐性を向上
打ち手③：燃料ステージングによりメイン(予混合)の燃空比を下げて逆火耐性を向上 }⇒②,③で水素混焼率を増加させるとともに、水噴射無しでの水素30vol%超混焼を達成する

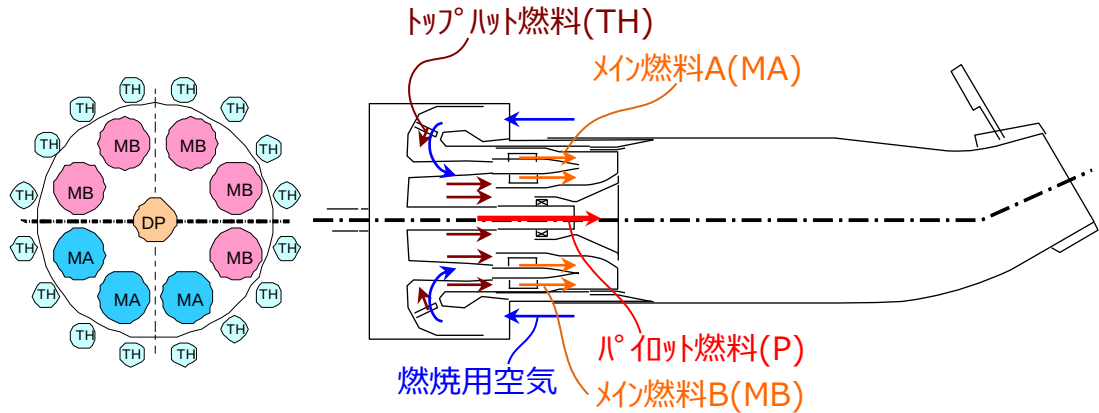
打ち手② メインの逆火耐性向上

メインフローパスの低速域を排除して
逆火耐性を向上する

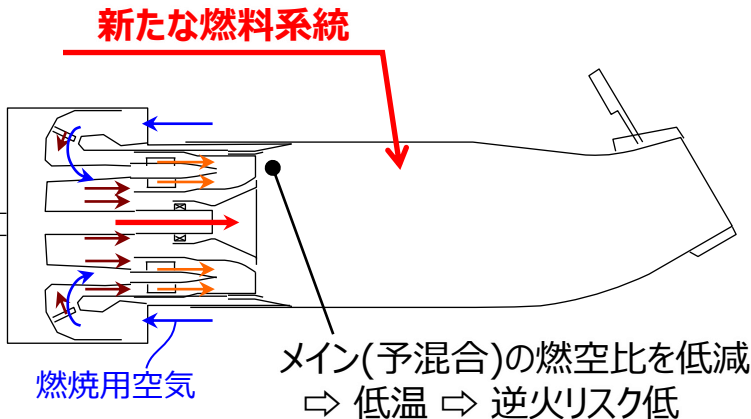


打ち手③ 燃料ステージングによる逆火耐性向上

既存の燃料ステージングの最適化



新たな燃料ステージング技術の開発

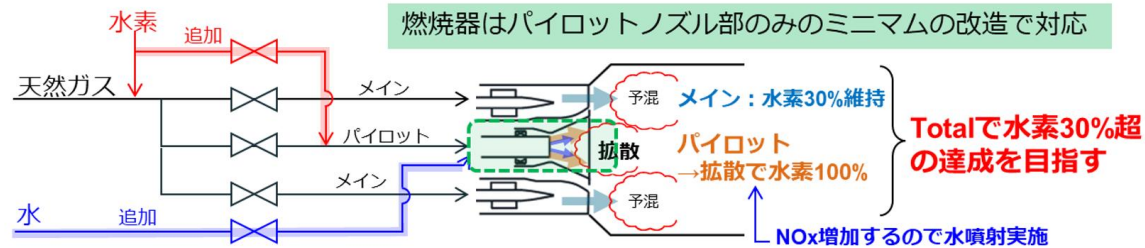


3. 研究開発成果について ◆単缶燃焼器 実機圧力燃焼試験

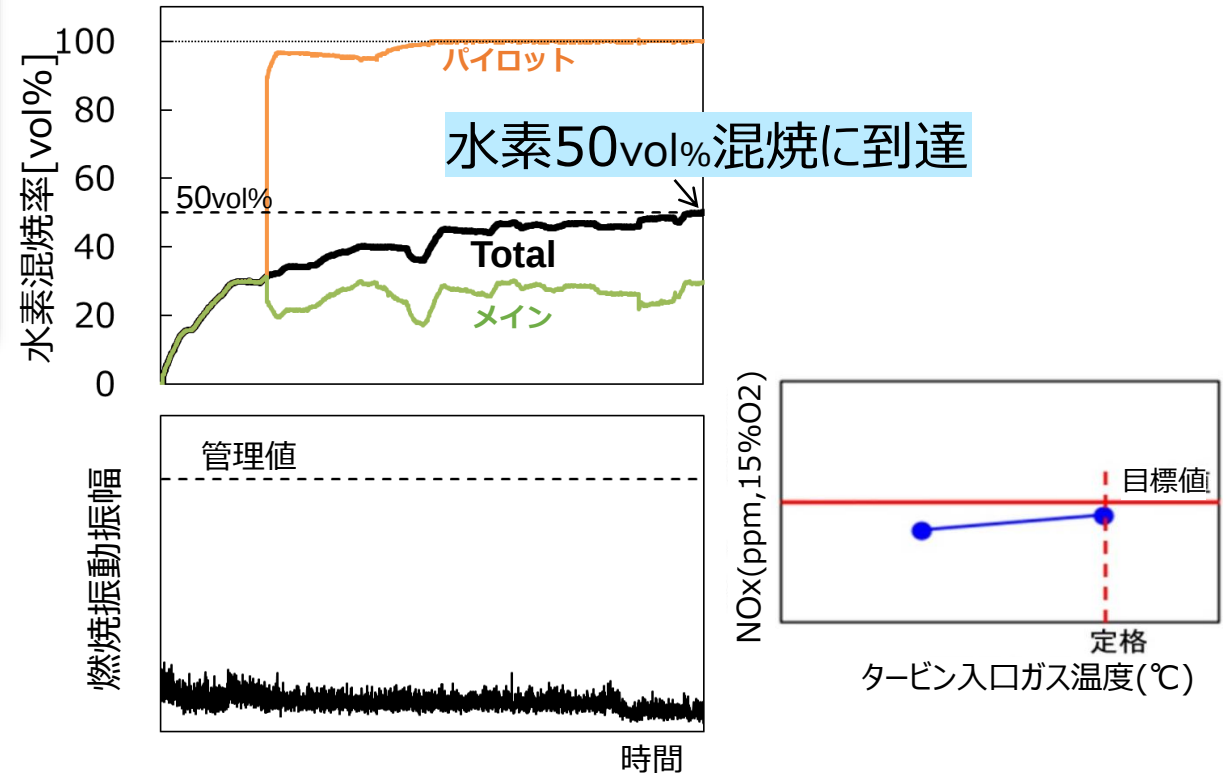
- 目標：単缶燃焼器での実圧燃焼試験を行い、水素30vol%超混焼において、逆火が発生することなく、燃焼振動が管理値内で安定燃焼が可能であることを確認する
- 成果：打ち手①の単缶燃焼試験を実施し、NOxは目標値以下で逆火や燃焼振動の上昇傾向を伴わずに水素混焼率50vol%に到達した
- 成果の意義：EUタクソミー達成の実現可能性があることを確認、今後の燃焼器開発のベースとして実機実証に向けて改良を進める

打ち手① パイロットを逆火リスクを伴わない拡散燃焼方式(*)にしてパイロット側で多くの水素を消費し、Total水素混焼率を増加させる。なお窒素酸化物(NOx)は増加するのでDe-NOx水噴射(拡散燃焼器と比較すると少量)が必要となる。

(*拡散パイロット系統も標準的に搭載済み)



実圧燃焼試験設備



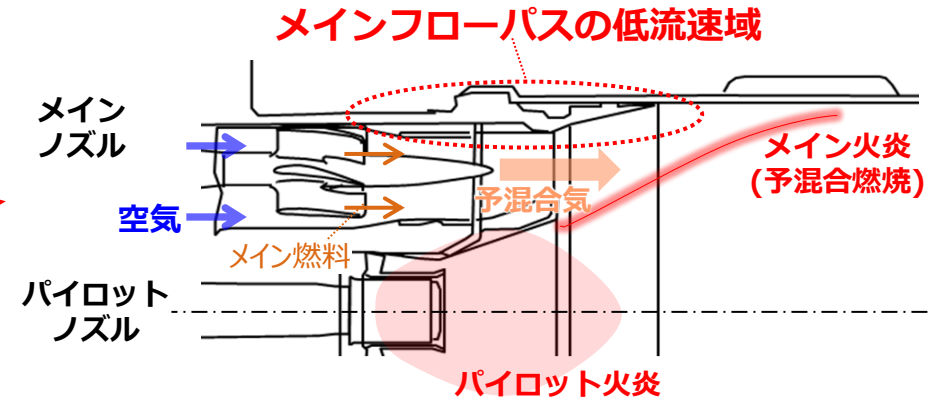
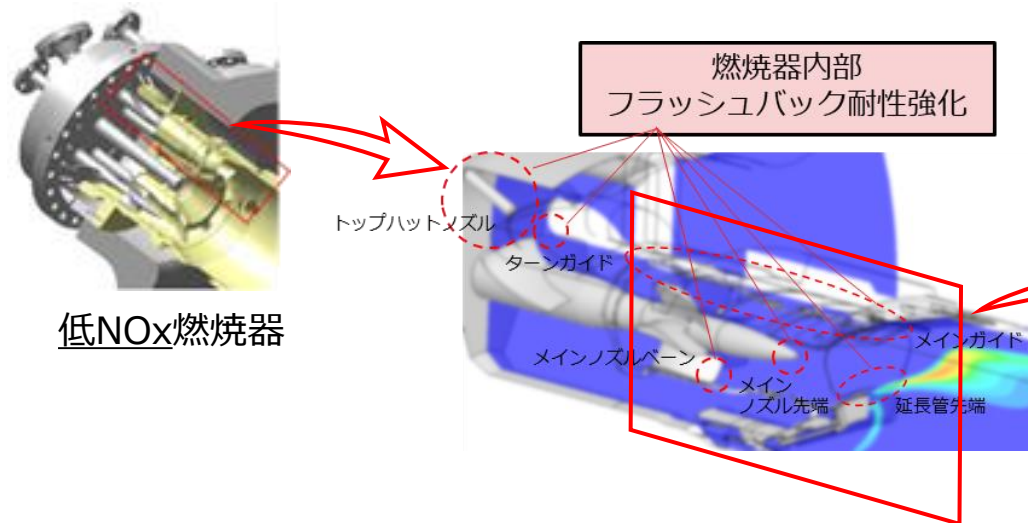
実圧燃焼試験結果

3. 研究開発成果について ◆逆火抑制のための逆火耐性向上技術

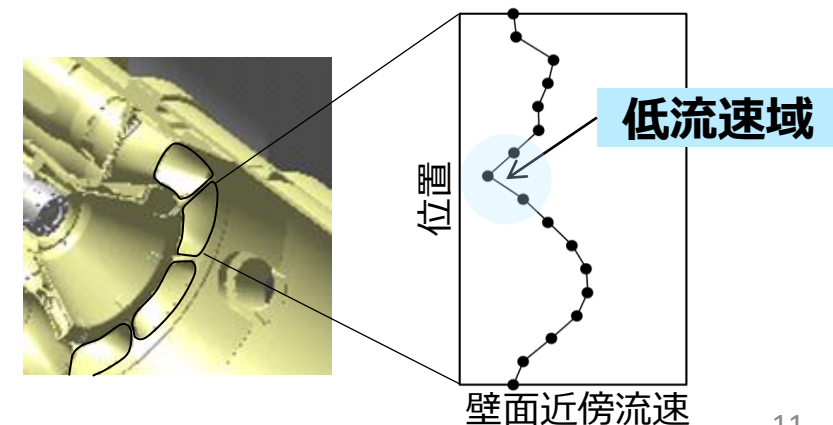
- 目標：数値解析・非燃焼試験にて逆火が生じやすい領域の特定と逆火耐性の向上を図る
- 成果：数値解析・非燃焼試験にて逆火が生じる可能性がある低流速域を確認した
- 成果の意義：逆火耐性向上を検討するにあたり、現行燃焼器における改良すべき部位の当たり付け

打ち手② メインの逆火耐性向上

メインフローパスの低速域を排除して逆火耐性を向上する



気流試験装置



3. 研究開発成果について ◆B プラント設計技術

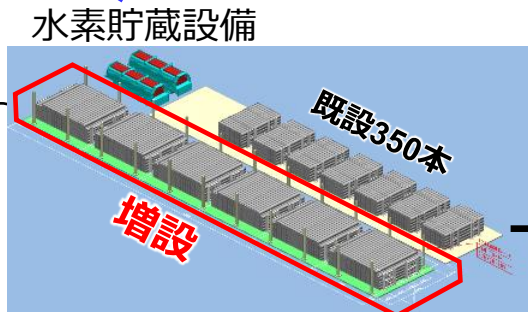
開発した燃焼器の実機適用を迅速に行うために、既存天然ガス焚きプラントでの改造範囲をミニマムとする系統設計を行う。
また、高砂水素パークにおける実機実証を実現するため、水素貯蔵設備、水素供給系統の設計・敷設および運用・制御の開発を行う。



開発項目B-1

課題：水素製造流量とGT水素消費流量の差を吸収する大容量貯蔵設備が必要

検討事項：入手性の高い水素ポンプを少ないスペースにより多く配置する検証を行う



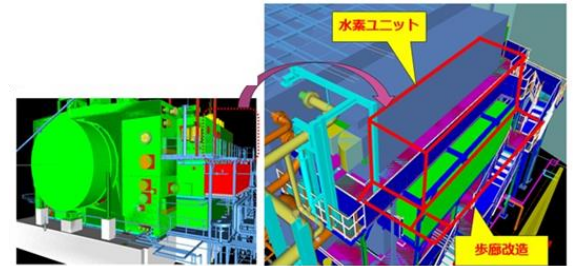
水素貯蔵ポンプ増設

	現状設備	設備増強後
水素ポンプ	350本	1050本
水素貯蔵量	約39 kNm ³	約120 kNm ³

開発項目B-2

課題：天然ガス焚きからの仕様変更方針確定

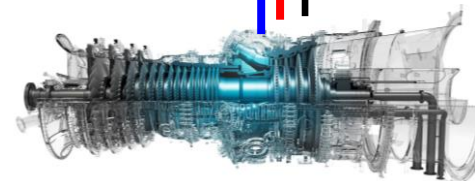
検討事項：水素パーク内の実証発電設備における水素混焼化工事を通して天然ガス焚きからの仕様変更項目を洗い出し最低限の改造内容を決定する



GTパッケージ 水素ユニット

水素系統増設

水噴射系統増設



開発項目B-3

課題：運用・制御

検討事項：当社実証発電設備へ適用、運転検証を実施し、改善点をフィードバックすることで水素混合設備の運用・制御を確立する

3. 研究開発成果について ◆B-1 水素供給量の更なる大容量化

- 目標：水素蓄圧器1基当たりのポンペ本数を増やすことで配置を効率化し、時間当たりの供給量を増加する
- 成果：ポンペ本数を増やした水素貯蔵設備の基礎工事完了、6基中 2基の蓄圧器据付完了
- 成果の意義：2基の蓄圧器を設置出来た事で既設と同等のエリアに既設の2倍の水素ポンペを配置する目途を得た

＜水素貯蔵設備の増強＞

	現状設備	→	設備増強後
水素ポンペ	350本		1050本
水素貯蔵量	約39 kNm3		約120 kNm3

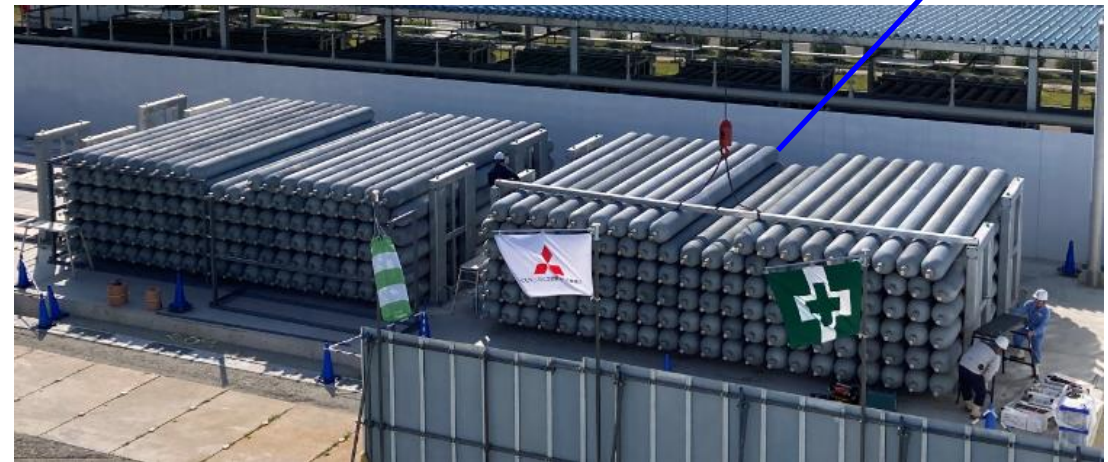
既設：50本/基
横10本×5段積み



増設：128本/基
横22本×5段積み
+18本



全7基中、4基を据付時点の写真



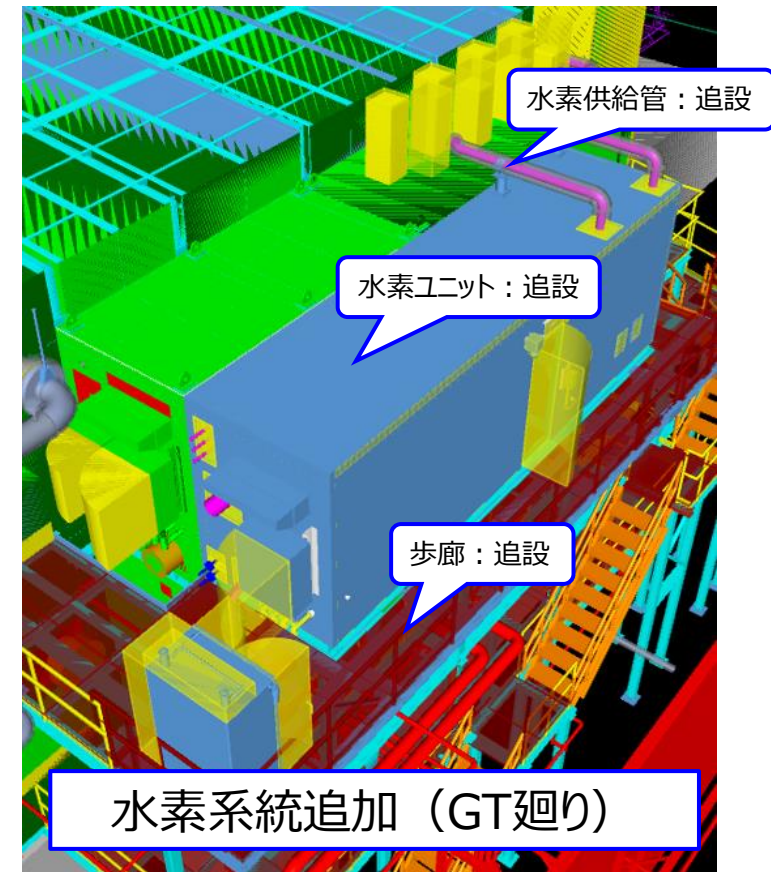
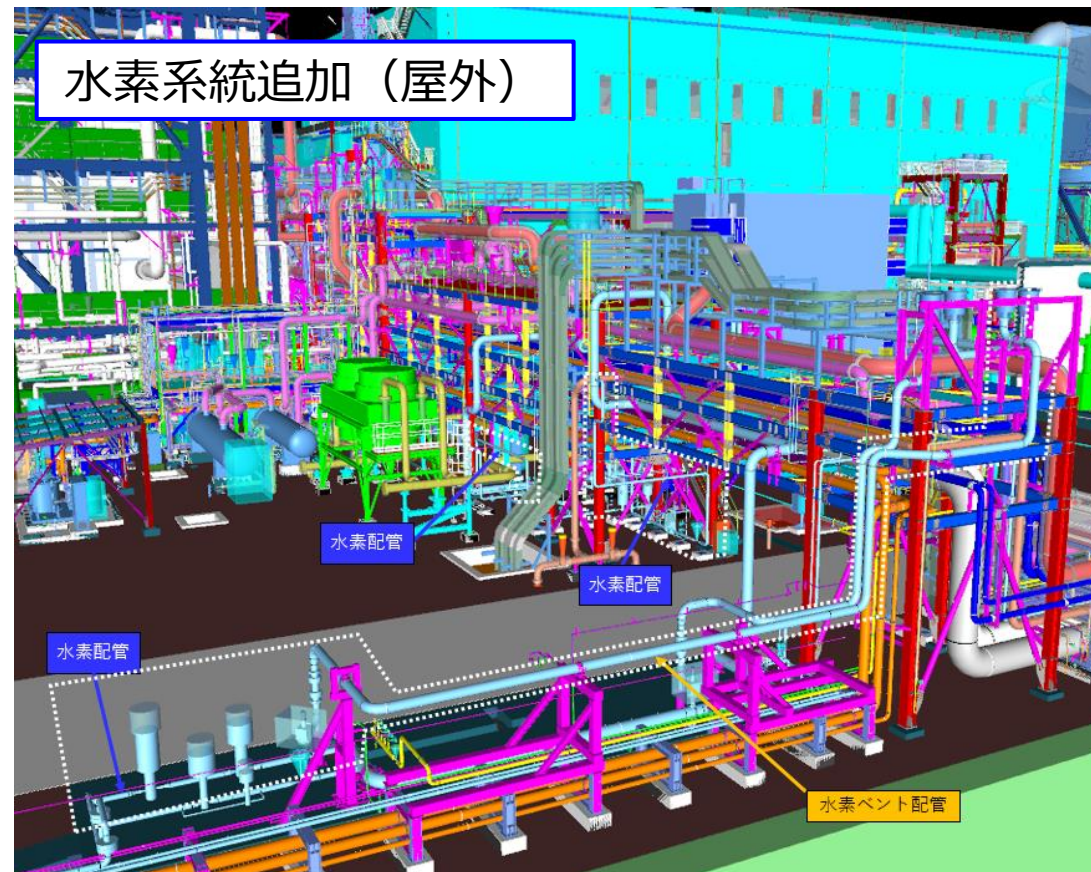
全6基中、2基の蓄圧器据付完了

3. 研究開発成果について ◆B-2 天然ガス焚きからの仕様変更方針策定

- 目標：水素混焼プラント化時の改造項目と内容の決定
- 成果：天然ガス焚き設備を水素混焼化する際の改造項目洗出し、改造計画、材料手配を完了した
- 成果の意義：商用機を水素混焼機へ改造する際の計画期間短縮、及び、信頼性の向上

< 改造項目 >

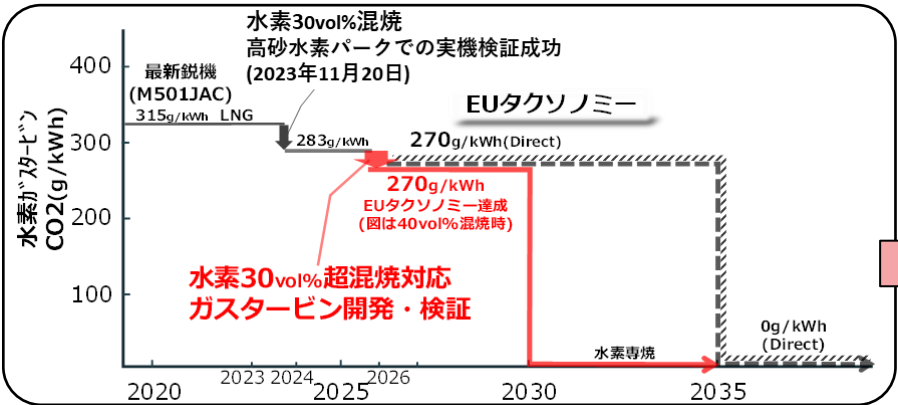
水素系統追加、水噴射系統追加、窒素系統追加、防爆仕様変更



4. 今後の見通しについて ◆成果の実用化・事業家の見通し

高効率ガスタービン発電設備における水素の利用は、大きなCO2排出量削減に加えて、大規模水素需要の発生による水素インフラ拡充やコスト低減を促し、重要な役割を担います。

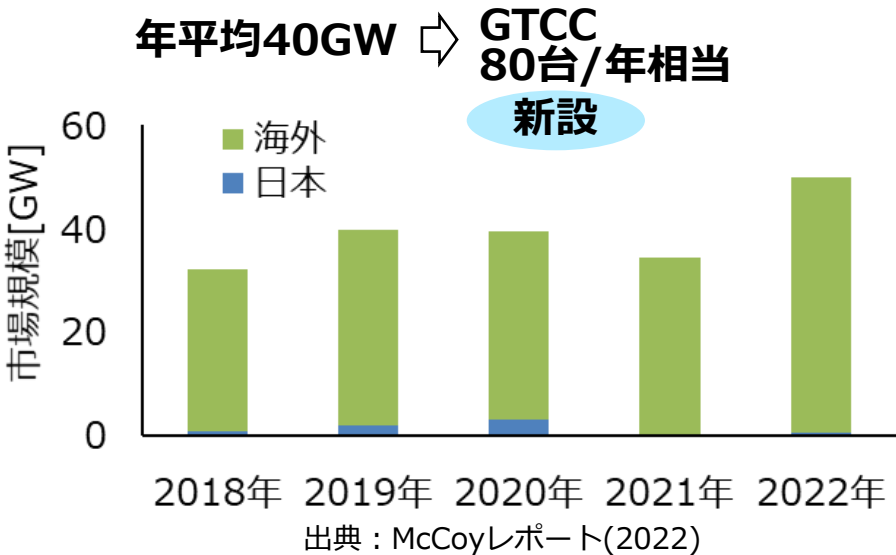
➡ 水素インフラ導入期での実用化を目指して、水素30vol%超混焼を可能とするガスタービン燃焼器の開発を行い、海外他社に先駆けてEUタクソミーのCO2排出基準270g/kWhの達成し、国内外の火力発電所へ適用、カーボンニュートラル社会実現に貢献します



年度	2020	2025	2030	2035
水素供給	インフラ導入期	インフラ成熟期 (水素30%超)		インフラ成熟期 (水素100%)
開発フェイズ	設計・試験・実機実証		本格的な実機展開	

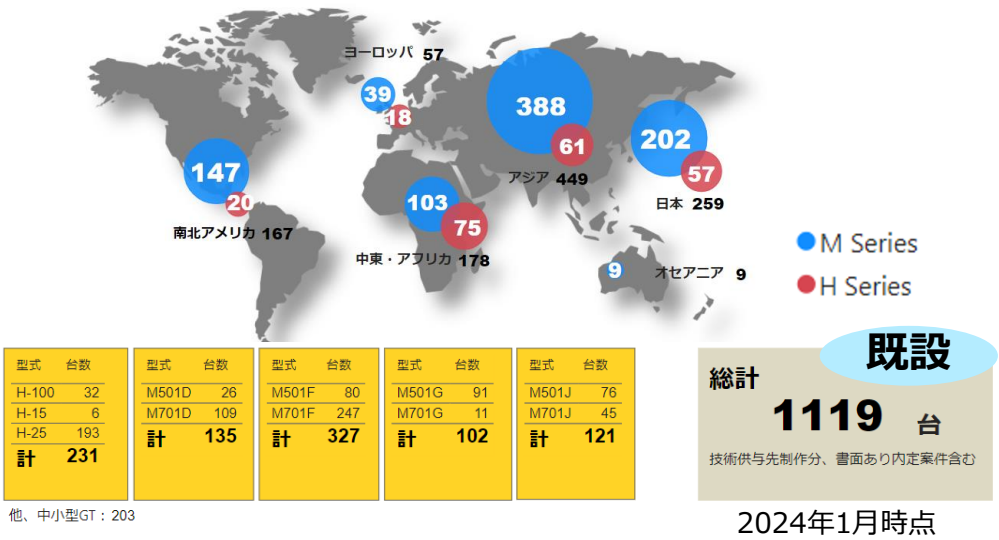
海外他社に先駆けてEUタクソミーを達成し、世界各国の新設・既設GT市場でのプロジェクト開拓

【新設ガスタービン市場規模】



【既設ガスタービン改造市場】

三菱ガスタービン納入・受注実績





三菱重工